

Hack For Japan

エンジニアだからこそできる復興への一歩

Hack
For
Japan

第62回

シビックテック祭り 「Code for Japan Summit 2016」

● Hack For Japan スタッフ
関治之 Hal Seki
Twitter @hal_sk

Code for Japanの関です。今回は2016年11月18～20日にかけて開催された、シビックテックのお祭り「Code for Japan Summit 2016」についてレポートをしたいと思います。

自分たちが住む地域の課題をテクノロジーを用いて解決する活動(シビックテック)は、海外だけでなく日本各地でも行われています。Code for Japan Summit(以下サミット)とは、シビックテックの普及啓発のために、Code for Japanのメンバーや行政職員、各地で活動しているシビックテック関係者が一緒になってシビックテックの活動を紹介し、悩みを共有し、相互に学ぶための場です。

今年は、横浜市金沢区さんの協力のもと、横浜市金沢区総合区役所にてサミットを開催しました。全国からエンジニア、デザイナー、行政職員などシビックテックにかかわる多くの方々が参加して、活発な議論が行われました。今回のサミットのテーマに掲げた「Voyage(出航)」にふさわしく、新たな仲間との出会いや新たな活動のスタートの契機となるイベントになったと考えています。会場の装飾も、船出というキーワードにからめてこだわっています

◆写真1 VOYAGEにからめて、いろいろな仕掛けをしました



(写真1)。

参加者は3日間の延べ人数で約650人。正確には把握できていませんが、ユニークにすると400人ほどが参加いただいたと思います。関連ツイートは、450以上にものほりました。

サミット1日目

1日目は、金沢区長も呼びして、「シビックテックと地域協働のネクストステップ」というパネルディスカッションを行いました。

区長に金沢区の地域協働に関する取り組みをうかがった後、この連載でもおなじみの、Hack For Japanの及川卓也さんに登壇してもらい、シビックテックが次のステップに進むにはどういったことが必要かをお話いただきました^{※1}。

及川さんからは、ご自身もかかっていたSpending.jpのプロジェクトをケースにして、ビジネスとして考えたときに必要となる価値設定や、人に届けるために必要なこと、プロダクトマネジメントの必要性を伝えてもらいました。

その後、Code for Kanazawaの福島さんも参加し、どのように地域の人達とつながって、継続的に活動をしていくかを話し合いました。印象的だったのは、Code for KanazawaではNPOや地域の人達にも同団体に入ってもらって、一緒にプロジェクトを起こしているという点でした。そうしないと「Code for Kanazawaに頼めば何かやってくれる」という感じでお客さん立場になってしまうことで、活動が続かなくなることが多いとのことでした。

注1 スライドURL : <https://t.co/0Kc0qymV0h>

その後は会場を分けて、分科会に。さまざまなセッションが行われましたが、筆者が参加していたセッションを中心にご紹介します。

▶ インターナショナルセッション

Code for AmericaのMonique Baena-Tenさんや、台湾のシビックハッカーであるT.H. Scheeさんが来日していたので、英語のみのセッションを企画しました。人数が20名くらいだったので、車座になって皆でディスカッションを行いました(写真2)。

アメリカ、台湾でのシビックテック事情をうかがい、Code for Ibarakiの柴田重臣さんからも日本の各地の状況をシェアしました。アメリカの大統領選の影響についてもリアルなところを聞いて、とても勉強になりました。THさんは、「Civic Tech is like a ocean」と表現しましたが、シビックテックを進めていくことは、荒波を航海するようなもの。良いときもあれば、悪いときもあります。そんなときに、このように各地の活動をシェアし、世界中で頑張っている人達がいることを知ることは、とても良い機会だと思いました^{注2}。

▶ ブリゲイド相談会

Code for Japanと連携しながら各地で課題解決を行っているCode forコミュニティを、「ブリゲイド」と呼びます。このセッションでは、ブリゲイド同士が集まって相互に悩みを相談する相互相談会を行いました。活動内容の見える化や、より良いコミュニティ運営のやり方について、多くの意見が出ていました。筆者の参加したテーブルでは、各地の情報を共有するハッシュタグを作り、Code for Japan側でそれらを拾ってニュースレターを定期的に配信するなどのアイデアが出ていました。実施を検討したいと思います。

▶ Code for フェロー大報告会

Code for Japanでは、企業と自治体間の組織の壁を壊して、ともに考える人材づくりを行う目的で、

◆ 写真2 Code for AmericaのMoniqueさんも参加



企業の従業員が自治体の職員として役所内で3ヵ月間働く、人材育成プログラムを行っています。これまで、8自治体に18人のフェローが派遣されています。実際に派遣を体験した4名が参加して、パネルディスカッションを行いました。

セッションでは、奥野和弘さんから「鯖江に行ってみてびっくりしたのが、言葉が通じないこと。アメリカ人とのほうがはるかに話を通じる！ いかにもプロトコルに頼っていたのかわかった」といった話がでたり、神戸に行っていた松村亮平さんから「請負とコーポレートフェローシップの違いは上下関係があるかないか。対等の関係で課題に向かえる」といった話、同じく神戸に行っていた宮崎光世さんからは「市というのは市民への良い発信の手段を意外と持っていない。新聞は年齢層が高い。ネットをうまく活用する余地がたくさんある」といった話が出てきました。

そのほかにもたくさんのセッションやワークショップがあり、そこかしこで情報交換がされていました。ちなみに、1日目でも人気のあったセッションが「シン・ゴジラセッション」(写真3)。

自治体職員がシン・ゴジラをテーマに防災を語るというもの。そのほかにも政府職員によるIT戦略のワークショップがあったり、政府や自治体の職員による企画が多くあるのも、Code for Japan Summitの特徴です。

サミット2日目

サミット2日目は、Code for AmericaのMonique

注2 THさんのスライドURL: <https://drive.google.com/file/d/0BxiwX2rqs8dzTW16alZkdeJ1Nwc/view>

Hack For Japan

エンジニアだからこそできる復興への一歩

Baena-Tanさんによるキーノートスピーチから始まりました。MoniqueさんはCode for Americaで、地域活動の取り組みのユーザ調査を指揮してきました。おもに、組織的な最優先事項とコミュニティのニーズを明らかにする、参加型デザインの調査プロセスの開発をブリゲイドと行ってきました。またCode AcrossやNational Day of Civic Hackingといった全米中の行動を促す日(national days of action)のプログラムの開発やコーディネーションなど、ブリゲイドのネットワークマネジメント支援も行ってきました。

行政と地域コミュニティが協働するための具体的な方法やヒントが満載のプレゼンでした。

1. 一般的な言葉、その場にいる人が理解のできる言葉を使いましょう
2. 期待値をコントロールしましょう
3. コミュニティの中間で引き合わせましょう

という3つの方法論や、各地のブリゲイド向けの活動のアドバイスもありました。情報発信や内部のコミュニケーションツールとして、MeetupやMedium、Slack、Loomio、Google Docsなどを活用しているそうです。

最後に締めくくりに言葉として言ってくれた、「You are not alone. あなたは一人ではありません。この課題に向き合っているのは我々だけではありません。行政の中にも市民の中にも行政に限らずさまざまなバックグラウンドを持った人たちがいて、それぞれ今の政治がうまくいくように取り組んでいます。

す。それを忘れないでください。」という言葉は、多くの人の心に響いたようです。

その後、1日目と同じく分科会セッションに入りました。筆者が参加したセッションからいくつかご紹介します。

公共システムの開発を成功させるには

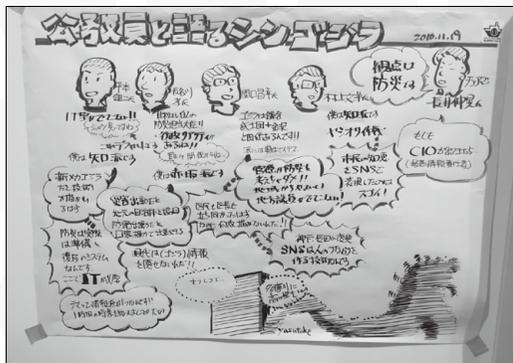
Code for Japan初のフェローとして2014年から福島県浪江町に勤務し、町民向けアプリの開発を行った後、2016年4月からはIT専門官として神戸市に勤務している吉永隆之さんがセッションチェアとなり、同じく浪江町の町民向けアプリ開発プロジェクトにかかわった合同会社インフォラウンジの肥田野正輝さん、千葉市でオープンデータ施策やちばレポの立ち上げにかかわり、Code for Chibaの活動にも積極的に参加している千葉市役所 広報広聴課長の松島隆一さんにお話をうかがうセッションでした。

公共システムの開発は、通常の企業が行うものよりも制約がたくさんあります。随意契約が難しく、開発企業を好きには選べない問題や、アジャイル開発に向かない契約形態、異動などの影響で役所側とベンダー間の知識の非対称性が大きくなりがちで丸投げになってしまう、などです。

吉永さんから、浪江町のシステム開発で実際に体験した話をシェアしてもらいました。吉永さんからは公共調達に関して、行政システムのオープンソース化や、アジャイル開発ができる会社を見つけること、段階的な開発プロセスの導入などを提言していました。

松島さんが言っていた印象的なこととして、「システム調達の面から考えると、役所のフロント部分のシステムはブルーオーシャン。多くのベンダーが入り込んでいる既存部分を攻めるより、シビックテック側は外側の部分を攻めるほうが良いのでは」「役所の内側のシステムを変えていくには、シビックテック側の人々が役所の中に入っていく必要がある。CfJの関さんが神戸市のCINO(Chief Innovation Officer)になったり、吉永さんが市の職員になったりという動きがもっと起こると良いのでは」という点がありました。

◆写真3 シン・ゴジラセッションのグラフィックレコード



▶ Government × Startup

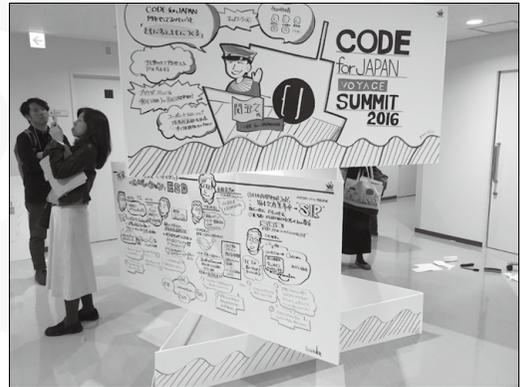
こちらは筆者が担当したセッションです。福岡市、神戸市、大阪市など、スタートアップを支援する自治体が増えてきました。世界的に見ても、市職員がスタートアップとタッグを組んで共に解決に挑むサンフランシスコ市や、4,500万ドル規模のスタートアップ支援を発表したホーチミン市など、自治体とスタートアップの結びつきが注目されています。

神戸市でスタートアップ支援を推進する多名部重則さんや、経済産業省でスタートアップと協働した経験を持つ津脇慈子さんにお話を聞きました。筆者からは、サンフランシスコの先進事例として、自治体が提示した地域課題をスタートアップが支援するStartup in Residenceプログラムを紹介させてもらいました。

多名部さんは神戸市で500 Startupsを始めとするスタートアップ支援施策を推進している人です。神戸市のスタートアップ支援は、市長から「なにかワクワクすることを企画してくれ」という話があったことからスタートしたとのこと。スタートアップが成長するには大きなエコシステムが必要という考えから、神戸市が支援するスタートアップは神戸市になくてもかまわないという姿勢で、神戸市外からも広くスタートアップを集めています。

津脇さんは経済産業省のプロジェクトで、スタートアップとアジャイルプロセスのシステム開発を行ったのですが、そのときに「発注側と開発側との信頼関係がないとアジャイル開発はちゃんと回らない」という点を強く感じたそうです。プロジェクト開始後、経産省側から「なにがどう進んでいるかわからなくて不安」という意見が出始めたときに、実際に開発現場に足を運んで、バックログの説明やタスクカンバンの作業内容の説明などをしてもらったところ、安心できたしコミュニケーションもうまくできるようになったとのこと。そのときの経験を活かし、今進めている地域IoTのプロジェクトでは、企業側に経産省の担当がついて、規制緩和についての取り組みを進めるなど、「ともにつくる」側に回るやりかたを実施しているそうです。Code for Japan

◆ 写真4 グラレコタワー



のコーポレートフェロウシップでは、企業の人材が自治体に派遣されますが、その逆のパターンもあるのだと勉強になりました。

お二人と話す中で、行政がスタートアップを育成する取り組みが広がるには、行政側とスタートアップが立場を越えて同じ目的意識を共有し、プロジェクトベースで協働をしていくことが重要なのだと感じました。とはいえ、「行政と付き合うのは面倒」と敬遠してしまうスタートアップもまだまだ多いと思います。Code for Japanとしては、スタートアップとの連携や起業家育成について、政府にいろいろと提言をしていきたいと考えています。

▶ グラフィックレコーディング

Code for Japan Summitは、日本でもかなり早い段階(2年前のサミット)で大規模なグラフィックレコーディングチームで会場のセッションを記録したのですが、今回も新たな取り組みをしました。多くのセッションをレコーディングして張り出しただけでなく、写真4のように、タワー状にレコーディングを組み合わせて、立体的に展示を行っています。

この前で記念写真を取っている人もたくさんいて楽しかったです。グラレコチームの皆さん、どうもありがとうございました！

★ ★ ★

2017年もサミットは実施する予定ですので、ご興味を持っていただいた方は、Code for JapanのFacebookグループなども覗いてみていただければと思います。SD